

自己評価、目標設定、ジャーナル・アプローチを 組み合わせた包括的学習支援ノートの活用法とその効果

—— 中国在住日本語学習者を対象に ——

A Comprehensive Learning Support Note Approach for Japanese Learners in China

加藤 靖代

Yasuyo KATO

(ハルビン工業大学外国語学部)

王 百合

Yuri OH

(和歌山大学教育学部)

2015年10月1日受理

Abstract

This paper presents a new Japanese-learning approach for people in China, based on the comprehensive learning support note. The support note consists of three parts, i.e. self-evaluation, goal-setting and diary-writing, which evolve the learning process into three stages. Firstly, the learners evaluate their own Japanese level in a self-evaluation list containing Can-Do statements. Secondly, a practical goal is set every month, and will be self-evaluated accordingly next month. Lastly, they keep a diary, and feedbacks from their teachers are obtained on it. As a result, it is found that this method can promote the Japanese-learners' autonomy, and a great learning motivation can be maintained and enhanced. In return, this approach plays an important role in helping many teachers.

Keywords : Support note; Self-evaluation; Goal-setting; Diary-writing.

1. 研究の背景

ハルビン工業大学で日本語専攻の3年生を対象とした「高級日本語」を担当する中で、学習者に対して以下の二つの問題点を感じた。

一つ目の問題点は、学習者の主体性、自主性の欠如である。学習者がより高いレベルを目指すには、学習者自身で必要なものを見極め、学ぶという主体性が必要となる。学習者は教師の指示に対しては非常に真面目に対処するが、教師の指示がなければ、自主的に行動することが少ないと感じた。このような状況では、より高いレベルの学習者になることは困難である。よって、学習者の主体性、自主性の育成が重要な課題だと感じるようになった。

もう一つの問題点は、やる気の喪失である。中国の大学の日本語専攻の学生は、2年間で日本語の基礎の習得が終了する。基礎段階は、勉強すればするほど、日本語能力の向上が感じられる時期である。しかし、3年生になると、基礎段階が終わり、中上級段階に入る。ここからは、上達が非常にゆっくりで、自分自身の能力の向上を感じにくい時期になる。向上が感じられないと、人はやる気を失いやすい。さらに、黒竜江

省ハルビン市は、中国の内陸部に位置し、日系企業や日本からの留学生が非常に少ない地域的なデメリットがある。日本語を身につけても、それを実際に活かす場が少ないため、日本語学習へのモチベーションを維持するのが困難である。

このような問題点が存在するが、3年生という時期は、上級レベルの日本語能力が身につけられるのか、それとも、基礎レベルの日本語能力で終わってしまうのかという重要な過渡期である。では、上記のような問題点を解決するために、教師は、どのような学習支援ができるのであろうか。そこで、我々は、自己評価、目標設定、ジャーナル・アプローチを組み合わせた包括的学習支援ノート(以下学習支援ノートとする)を作成し、そのノートを用いた活動を行った。本研究では、学習支援ノートを用いた活動方法と効果を明らかにし、同じような問題を抱える教師の参考となることを期待する。

2. 先行研究

2.1 自己評価の利点

トムソン木下(2008)では、自己評価が有効に利用さ

れることによって、下記の利点をもたらすことが可能であると報告している。

- ・学習者が内省の機会を得る。自分ができ、できないことが意識化できる。
- ・学習者が自己肯定の機会を得る。でき、できないことの確認で自信が付く。
- ・学習者が自分の学習目標の明示化の機会を得る。できないことの意識化から、次の目標が設定できる。
- ・学習者自身が言語学習の方向を修正することで、言語習得の効率上がる。
- ・学習者が評価を自分のものとするのでやる気が出る。
- ・学習者が自分のすべてを考慮した評価ができる。
- ・学習者が自分の評価に積極的に関わることで、自分の学習に対する責任感が増す。
- ・自己評価に関わることで学習者オートノミーが育つ。

上記から自己評価には、多くの利点があることが分かる。学習者が自己評価することで、自己を見つめ、不足点を知り、その不足点を改善する方法を考えるようになる。それが次の目標設定に繋がり、学習者は自律的に学ぶようになる。つまり自己評価が有効に行えれば、学習者に主体性が生じる。また、自己評価を自分のものにするので、やる気が出て、学習に対する責任感が増す。以上のことから、自己評価が、主体性の欠如とやる気の喪失を解決する手段となる可能性を感じ、本活動に取り入れることにした。

2.2 Can Do statementの利点

欧州評議会による「言語のためのヨーロッパ共通参照枠(CEFR)」は、欧州で共有されることを目指した言語教育・学習の汎言語的なフレームワークで、言語能力の熟達度を示す6つの共通参照レベルと、「実際の言語使用場面で何ができるか」を記述した493の例示的能力記述文(Can Do statement、以下Can-Doとする)を提供している(塩澤他2010)。各レベルの能力は、「～できる」という肯定的な表現で記述され、「言語教育の専門家ではない学習者が読んでも分かるように」という配慮がしてあることが特徴である(真嶋2010)。

CEFRのヨーロッパに限定しない普遍性から日本語教育にも取り入れられており、国際交流基金は、CEFRを基に「JF日本語教育スタンダード」を作成している。また、CEFRを実際に取り入れている大学もある(西口2012、鈴木他2013、渡部2013)。

CEFRは、6つのレベルの基準が明確で、言語教育の専門家でない学習者にも分かるような配慮があるため、学習者にとっても受け入れやすいと考えた。また、Can-Doが「～できる」という肯定的な表現で記述されているため、学習に対する気持ちを前向きにすることが期待できる。以上の理由から、Can-Doを自己評価の項目に取り入れることにした。

2.3 ジャーナル・アプローチの利点

ジャーナル・アプローチとは、一冊のノート交換を一定期間継続させることによって学習者と教師が日本語を媒介に、信頼関係の形成、対話的關係性の構築を図りながら、文化的相互理解の深化を目指す教育活動である(倉地2010)。ジャーナル・アプローチの目的は、(a)学習者の不安を取り払い、緊張感を軽減すること、(b)異文化生活の中で遭遇する問題に対して具体的な問題解決能力をジャーナルを媒介とした対話の中で学習者が発見学習的に培うことである(倉地1994)。

ハルビン工業大学は、中国内陸部に位置し、日本企業や日本からの留学生が非常に少ない地域である。そのため、在日日本語学習者のように異文化衝突の問題は起こりにくい。在中日本語学習者には、別の問題が存在する。それは、4年間の大学生活の中で、日本語の使用機会が少ないため、モチベーションを維持しにくいこと、そして、自分の日本語能力を試す機会が少ないため、日本語能力に確信が持てないことである。ジャーナル・アプローチの最終目標は、文化的相互理解である。しかし、ジャーナル・アプローチには、学習者の不安を取り払い、緊張感を軽減する効果もある。学習者の情意フィルターを低くしたり、学習援助者との間のやり取りを通して、学習者自身が問題点に気づき、解決する能力を培うという点は、異文化理解以外の言語学習にも有効であると考えた。そこで、この点に着目し、ジャーナル・アプローチを本活動の中に取り入れることにした。

3. 包括的学習支援ノートの構成と活用方法

3.1 包括的学習支援ノートの構成

学習支援ノートの構成は、自己評価表、目標設定、日記の3つの部分からなる。以下では、それぞれの構成について説明する。

3.1.1 Can-Doを用いた自己評価表

CEFRのB1レベルのCan-Doから本授業と関係する「聞く、読む、やりとり、要約、プレゼンテーション、テレビや映画を見る、異文化理解」に関する18のCan-Doを選択した。これらのCan-Doに対して、期首、期末の2回、学生が自己評価を行う。評価は4段階で、「楽にできる」、「一人でできる」、「他人の助けが必要だが何とかできる」、「できない」である。

「熟達した言語使用者」の中のB1レベルを選択した理由は、ハルビン工業大学では、2年生に基礎段階を終了し、3年生終了時に、N1レベルに達するようにカリキュラムが作成されている。B1レベルのCan-Doの内容と3年生で目指す水準が合致していると考え、B1レベルを選択した。

3.1.2 目標設定と目標に対する反省

先の自己評価表を参考に、一ヶ月ごとに学生が自分自身で目標を設定し記載する。そして、一ヶ月後、目標に対して達成できたか、また、何ができなかったかについて反省し、学習者自身が評価を記載する。

3.1.3 日記

2週間に1回、日記を教師に提出する。週に1回、学習者は、日記を書き、それについて、教師が返事を書く。日記の内容は、特に制限せず、何を書いても自由とする。ルールとしては、日記の語彙や文法等の誤りを教師は訂正しないこと、日記で書いたことは本人の許可なしに口外しないこと、教師は返事に極力否定的なことは書かず、できる限り学生を励ますコメントを書くことである。

3.2 包括的学習支援ノートの目的

学習支援ノートは、上記で述べたとおり3つの部分からなっており、それぞれの目的が異なる。一つ目の自己評価表では、自分が何ができて、何ができていないかを自分自身で考え、自分自身の日本語能力を内省することを目的としている。二つ目の目標設定は、先の自己評価の中で自分自身の不足点に対して何をすべきかを考え、目標を設定し、それについて一ヶ月間、自主的に学習することを目的としている。三つ目の日記は、日々の学習を教師が応援することで学習への動機を維持することを目的としている。一人で勉強するとなると、時には、怠けてしまったり、やる気を失ってしまうことがある。教師が、学習者の伴走者として、見守り、必要な時には、手を貸し、アドバイスすることにより、やる気を奮い立たせる効果を期待している。また、学習者と教師との心理的距離を近くすることで、不安、緊張を取り除くことも期待している。

3.3 対象者と実施期間

対象者は、中国黒竜江省ハルビン市にあるハルビン工業大学外国語学部日本語学科の3年生合計30名。実施期間は、2012年から2014年の各年の前学期。3年生を対象とした「高級日本語」の授業の一部として学習支援ノートを使用した。そして、授業の最後に、本活動についてのアンケート調査を行った。

4. 結果と分析

4.1 包括的学習支援ノートについての分析

4.1.1 Can-Doを用いた自己評価の変化

本活動で用いたB1レベルのCan-Doの内容と期首と期末の評価の変化の割合を、表1に表した。期首と期末を比較し、評価が上昇した場合は「+」、下降した場合は「-」、変化がなかった場合は、「0」とし、割合で示した。

50%以上が上昇したと評価したCan-Doは、18項目中、(3),(7),(18)の3項目であった。Can-Doの内容を見ると、(3)には「詳細な指示」、(7)には「自信を持って」、「あまり日常的でない状況」という表現があり、(18)は異文化理解についての内容である。これらの内容からも分かるように、他のCan-Doと比べて難易度が高いと感ぜられる。このように難度の高い項目に対しては、期首には自信がなかったが、期末には向上したと学習者が感じたことが明らかになった。

また、18項目中10項目に対して、50%以上の学習者が、「変化が無い」と評価した。そして、わずかではあるが、「下降した」という回答も見られた。その理由として、これらの10項目に、「はっきりとしていれば」、「簡潔な事実関係」、「身近な」、「自分の関心のあること」、「日常の」、「時には言いたいことが言えないこともあるが」、「簡単な」という言葉が含まれていることが影響していると考えられる。学習者は、これらの言葉から難易度を低く感じ、期首に高い評価をする傾向があった。期首の時点で高い評価をしているため、期末での差が生じず「変化が無い」という結果になったと考える。ただ、教師の印象としては、B1レベルが学習者の水準に合っていないというよりも、期首の時点で、教師の予想より学習者が高い評価をしていることがこのような結果をもたらしたと思われる。さらに、学習者が期首では気付かなかった問題点を、学習するにつれて気づき、期末で厳しい評価をしていたケースも見られた。学習者は、期首のときは自信があった項目について、さらにより深く学ぼううちに、以前は気がつかなかった問題点を見つけていた。これは、数値上は、後退した印象を受けるが、学習者がより客観的な目で自分自身を見られることとなった現れだと捉えることができるであろう。

4.1.2 学生が設定した目標

学習者が設定した各月の主な目標は、下記の通りである。N1合格の為の目標が最も多く、毎年、同様の目標設定をしていた。

- ・テレビドラマ：ドラマを見る、セリフを聞いて書き取る、セリフの真似をする
- ・聴解：毎日NHKニュースを聞く
- ・書く：作文を書く、日本語でブログを書く
- ・読む：読解文を読む、名作小説を読む、日本語の文章を読む
- ・日本語能力試験：文法を毎日覚える、既習文法を整理する、毎日15個単語を覚える

4.1.3 日記の内容

学習者の日記の内容は、映画・テレビ番組、授業、旅行、進路、放課後の出来事、家族・友人、季節・天候、教師へのメッセージと様々であった。内容は、非

表1 自己評価表の評価の変化の割合

(%、N=21、+：上昇、-：下降、0：変化なし)

分類	B1レベル Can-Do	+	-	0
聞く	(1)短い物語や、仕事、学校、余暇などの場面で普段出会う、ごく身近な事柄について、明瞭で標準的に話されたものであれば要点を理解できる。	47.6	9.5	42.9
	(2)授業中の話題について、簡単な事実の情報を理解できる。もし、話が大体聞き慣れた話し方で発音もはっきりとしていれば、一般的なメッセージも細部まで理解できる。	28.6	0	71.4
	(3)詳細な指示を理解できる。	52.4	4.8	42.9
読む	(4)自分の専門分野や興味に関連のある主題について、簡潔な事実関係の文章を読んで、十分に理解できる。	33.3	4.8	61.9
	(5)話題が身近なものであれば、時には知らない単語の意味を文脈から推定し、文の意味を推論できる。	42.9	4.8	52.4
やりとり	(6)簡単だが幅広く言葉を使え、身近な話題の会話に準備なしでも加わることが出来る。身近で個人的関心のある事柄、または日常生活に関連する話題(例えば、家族、趣味、仕事、旅行、時事問題)について個人的な意見を表明したり、情報を交換したりできる。	33.3	0	66.7
	(7)自分の関心や専門分野に関連した、身近な日常のおよび非日常的な問題について、自信を持って話し合いをすることが出来る。情報を交換、チェックし、確認できる。あまり日常的でない状況にも対処し、問題の所在を説明できる。映画、書籍、音楽などの抽象的な文化的話題について、自分の考えを表現できる。	52.4	0	47.6
	(8)時には特定の単語や表現を繰り返してもらわなければならないが、日常の会話で自分に向けられた話で、発音ははっきりとしていれば理解できる。	38.1	0	61.9
	(9)時には言いたいことが言えないこともあるが、会話や議論を続けることができる。	23.8	0	76.2
	(10)身近な話題についての会話なら準備なしに参加できる。	47.6	4.8	47.6
	(11)元のテキストの単語を使って、元のままの順序で、短い文章の一節を簡単な形で言い換えることができる。	19.0	0	81.0
ノートを取る	(12)もし話題が身近で、簡単な言葉で表現されており、はっきりとした発音で標準的な話し言葉で話されれば、講義を聞きながら簡単なキーポイントのリストを作ることができる。	47.6	4.8	47.6
	(13)もし話題が自分の興味関心の範囲であり、話がはっきりとしていて、組み立てがはっきりしていれば、後で自分が使うためには充分正確なノートを講義中に取りることができる。	42.9	9.5	47.6
プレゼンテーション	(14)自分の専門でよく知っている話題について、事前に用意された簡単なプレゼンテーションができる。ほとんどの場合、聴衆が難なく話しについていける程度に、はっきりとしたプレゼンテーションをすることができ、また要点をそこそこ正確に述べることができる。	33.3	9.5	57.1
テレビや映画を見る	(15)本や映画の筋を順序だてて話し、それに対する自分の考えを述べるができる。	47.6	0	52.4
	(16)映像と所作が話の大筋を伝え、はっきりとした簡潔な言語で話されていれば、かなりの映画が理解できる。	28.6	0	71.4
	(17)話し方が比較的ゆっくりと、はっきりとしていれば、インタビュー、短い講演、ニュースレポートなど本人の関心事である話題について、多くのテレビ番組の内容をおおいた理解できる。	47.6	4.8	47.6
異文化理解	(18)目標言語の文化と当人自身の文化との間の、慣習、言葉遣い、態度、価値観や信条について、最も重要な違いに対する認識があり、それを配慮することができる。	57.1	4.8	38.1

常に豊富で、毎回、教師は学習者の日記を読むのが楽しみであった。また、学習者も、教師からの返事を楽しみにしている様子が見られた。日記の分量は、学習者により差があり、少ない学生は、A4用紙に半分ほど、多い学生は、一回、3ページほどの長文であった。そして、教師は、日記に対して、A4用紙半分以上の返事を書くように心掛けた。返事の内容は、アドバイスや学習者の日記に対する感想であったり、注意を促すものなどで、日記を通して学習者と相互に意見交換を行った。

4.2 包括的学習援助ノートに対するアンケート調査結果

授業終了後に、学習者に本活動についてのアンケート調査を行った。7項目のうち5項目は選択式、2項目は記述式とした。選択式アンケート内容は、表2の通りである。記述式アンケートの内容は、「本活動で良かったことは何か」(表3)と「本活動で大変だったことは何か」(表4)である。

アンケート調査の結果から、学習者は、本活動に対し、概ね好意的な評価をしていることが分かる。「Can-Do評価をして、自分の成長が感じられましたか。」と「Can-Do評価をして、自分の問題点が明確になりましたか。」については、それぞれ93.3%が「はい」と回答した(表2)。本活動の良かった点(表3)としては、「毎月目標を決めて達成するように頑張る、勉強に役立った」が66.7%、「先生と交流できて普段話せないことも書ける」が30%、「自分の欠点をはっきりする」が23.3%あった。これらの結果から、本活動が、学習面、情意面の両方に良い影響を与えていることが分かる。しかし、本活動の困難点(表4)として、何を書いたらいいか困るときがあるという回答が、26.7%あった。このことから、日記を書くことが、学習者に対してストレスとなる場合もあることが分かる。

学習者の中には、話すことは苦手だが書くとなると水を得た魚のように様々な意見や思考を表現する学習者もいる。このような学習者に対しては、本活動は、

特に効果が大きかった。話すのが苦手な学習者は、普段の授業の中で発言が少ないため、学習者の考えや問題点を把握することが困難である。本活動により、学習者の問題点や要求、思考を教師がより深く理解することができ、学習支援を効果的に行うことができた。しかし、反対に書くことが苦手な学習者もあり、このような学習者は、本活動に対して苦痛に感じていた。そのような場合は、日記を書くことを強制せず、教師が学習者の話を聞くことや自己評価表を評価することで、日頃の問題点を明確にし、学習支援を行うように心掛けるようにした。

5. 考察

学習支援ノートを用いた本活動の目的は、「自主性の育成」と「学習者の動機の維持」である。アンケート調査結果(表2、表3)からも分かるように、本活動は、自主性の育成と学習動機の維持に効果があることが明らかである。

学習支援ノートの3つの部分を個別に見ていくと、Can-Doを用いた自己評価をすることで、学習者は、自分の成長を感じ、問題点や欠点が明確になり、身に付けるべきレベルが分かりやすいと感じられる。目標設定では、毎月目標を決めて達成するように頑張ることが学習の役に立ち、目標を意識して学習できる。日記では、情意面への効果が大きく、教師と交流できて普段話せないことも書けたり、自分自身の嗜好を認識したり、自分自身を励ましたりできる。このように、それぞれの部分において、学習に対し良い効果が見られる。

学習支援ノートの構成は、3つの部分に分かれているが、個別にそれぞれが独立していたら、これほどの効果は期待できなかったであろう。3つの部分が、相互に良い影響を与え合い、好循環をもたらしたからこそ、効果的な学習援助ができたと考える。自己評価で自己の日本語能力と向き合い、不足点を自分自身で確認する。自分自身で問題点を認識することが非常に重要で、これが次の目標設定に繋がる。学習者は、自分

表2 選択式アンケートの回答結果

(%, N=30)

質 問	はい	どちらでもない	いいえ
Can-Do評価をして、自分の成長が感じられましたか。	93.3	3.3	3.3
Can-Do評価をして、自分の問題点が明確になりましたか。	93.3	6.7	0.0
自分で決めた毎月の目標を、普段、意識しましたか。	76.7	20.0	3.3
目標を自分で決めることは、勉強に役に立ちましたか。	70.0	13.3	16.7
日記を書くことは、楽しかったですか。	66.7	23.3	10.0

表3 記述式回答：本活動で良かったことは何か

(% , N=30)

分類	内 容	割合
学 習	毎月目標を決めて達成するように頑張って、勉強に役立った	66.7
	自分の欠点をはっきりする	23.3
	身につけるべきレベルが分かりやすい	10.0
	成長のストーリーを記録できる	10.0
	成長が感じられる	6.7
	自分で勉強することに役立った	3.3
情 意	先生と交流できて普段話せないことも書ける	30.0
	日記を書くことが楽しかった	10.0
	何でも言いたいことを書ける	6.7
	自分自身を反省できる	6.7
	自分を励ますことができる	3.3
	自分の興味があることがよく分かる	3.3
日本語能力	自分の考えを日本語で表現することが上達した	10.0

表4 記述式回答：本活動で大変だったことは何か

(% , N=30)

内 容	割合
ない	36.7
何を書いたらいいか困るときがある	26.7
目標を自分の結果が離れているとき恥ずかしい気持ちになる	10.0
自分の能力を自分で評価するには難しい	10.0
伝えたいことが上手く日記で表現できない	6.7
Can-Doで進歩が感じられない	3.3
目標を設定するのは難しい	3.3
日記を書くのはあまり好きではない	3.3

自身に不足している課題を考えて、目標を立てる。自分自身で立てた目標なので、教師に無理やりやらされているという気持ちにならないため、自主性が育ちやすい。しかし、多くの人を経験したことがあると思うが、自分一人で目標に向かって努力することは、たやすいことではなく、挫折しやすい。そこで、日記の交流を通して、教師がサポーターとなり、学習者にアドバイスをしたり、励ましたりしながら、学習が継続できるように援助する。また、日記の交流をすることで、教師との心理的距離が縮まり、授業中、発言がしやす

くなったり、教師に親しみを感じたりと、授業に対しても良い効果も現れる。これら3つの部分が、互いにリンクしているため、より効果的な活動になるのである。

しかし、注意しなければならないことは、本活動がすべての学習者にとって万能ではなく、順調に進む訳ではないということだ。表4からも分かるように、いくつかの問題点が存在する。本活動中、教師が最も顕著に感じた問題は、書くことが苦手な学習者への対応である。書くことが苦手だと、本活動を苦痛に感じる。

このような学習者に対しては、この方法をそのまま行うと逆効果になる可能性が高い。その場合は、書くことを強制せず、学習者の特性を見ながら、書くことを話すことに変えてみたり、課題を軽減したりする措置が必要である。また、普段、書くことが苦にならない学習者でも、書く内容に困ることもある。その場合は、教師の方から学習者に質問する形で日記の返事を書いたりして、学習者が書きやすくなる支援が必要である。

6. まとめと今後の課題

本研究では、自己評価表、目標設定、日記の3つの部分からなる学習支援ノートを用いた活動方法を紹介し、その効果を明らかにした。学習支援ノートの分析、アンケート調査の結果から、本活動は、自律した学習者になる手助けができ、学習への動機を高める効果が期待できることが明確になった。

本研究の課題は、学習者の自己評価と教師との評価の差をどのようにすれば少なくできるかを検討することである。学習者が自己評価を行った際、学習者が教師の想像以上に高い評価をしたり、または厳しい評価をすることがあった。自己評価の精度を高めるためにも、このギャップを解消する方法を考える必要がある。今後は、自己評価をより効果的に行える方法を検討し、研究を重ねていきたい。

参考文献

- 倉地曉美(1994)「情意領域を重視した第二言語習得理論とジャーナル・アプローチとの接点－外国人学習者の文化学習と言語習得の関わり－」『広島大学日本語教育学科紀要』4, pp. 17-23.
- 倉地曉美(2010)「ジャーナル・アプローチとアセスメント－評価からこぼれ落ちるものの重要性に鑑みて－」『アセスメントと日本語教育』, pp.215-225, くろしお出版.
- 塩澤真季・石司えり・島田徳子(2010)「言語能力の熟達度を表すCan-do 記述の分析：JF Can-do 作成のためのガイドライン策定に向けて」『国際交流基金日本語教育紀要』6, pp. 23-39.
- 鈴木美加・藤森弘子(2014)「Can-doリスト開発プロセスにおける学習者の自己評価とその分析」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』40, pp.53-68.
- トムソン木下千尋(2008)「海外の日本語教育の現場における評価－自己評価の活用と学習者主導型評価の提案－」『日本語教育』136, pp.27-37.
- 西口光一(2012)「CEFRの構造と記述文とOUSカリキュラム」『多文化社会と留学生交流：大阪大学国際教育交流センター研究論集』16, pp.63-72.
- 真嶋潤子(2010)「CEFRにおける評価とアセスメント」『アセスメントと日本語教育』, pp.19-44, くろしお出版.
- 渡部良典(2013)「ヨーロッパ共通参照枠(CEFR)からみた上智大学外国語学部学生の複言語能力自己評価」『上智大学外国語学部紀要』47, pp.211-234.